

稼動リグ数を監視対象に追加

2016年8月23日(火)

第一生命経済研究所 経済調査部
主任エコノミスト 藤代 宏一
TEL 03-5221-4523

【海外経済指標他】

- ・22日の欧米市場では主要経済指標の公表はなかった。

【海外株式市場・外国為替相場・債券市場】

- ・前日の米国株は続落。フィッシャー副議長のタカ派発言に加え、原油価格の下落が嫌気された。WTI原油は47.05ドル(▲1.47ドル)へと反落。ベーカーヒューズ公表の稼動リグ数が増加、需給懸念が強まった。欧州株はまちまち。
- ・前日のG10通貨はGBPの強さが目立った一方、EUR、JPYはやや弱めの動きとなり、USDの強さは中位程度。USD/JPYは黒田総裁のインタビュー(産経新聞)を受けてアジア時間に上昇した後、欧米時間に入ると米金利低下と共に下落に転じ、上昇の大部分を失った。
- ・前日の米10年金利は1.542%(▲3.6bp)で引け。当初は週末のフィッシャー副議長のタカ派発言などから軟調に推移していたが、米国時間に入ると原油価格の下落と共に米債は堅調に推移した。欧州債市場(10年)はコア国を中心に堅調。ドイツ(▲0.080%、▲5.2bp)、イタリア(1.104%、▲3.0bp)、スペイン(0.935%、▲2.0bp)が金利低下となった一方、ポルトガル(3.028%、+1.9bp)は追随できず。3ヶ国加重平均の対独スプレッドはタイトニング。英国(0.560%、▲5.9bp)も金利低下となった。

【国内株式市場・アジアオセアニア経済指標・注目点】

- ・日本株は、海外時間のUSD/JPY下落が嫌気されるなか、米株安に追随して安寄り(9:05)。
- ・原油価格の反落に注意したい。稼動リグ数は14年10月の1600強をピークにほぼ一貫して減少した後、直近まで8週連続、6月以降の12週間のうち11週間で増加。稼動リグ数の増加が原油の増産に直結する訳ではないが、昨年夏と類似した展開になりつつある点は押えておきたい。昨年夏に原油価格が小康を保った局面では、稼動リグ数の減少が一服ないしは小幅増加し、その週間後に原油が増産に転じると、ドライブシーズンの終了という季節性も相俟って原油在庫が増加。結局、原油価格上昇を受けた稼動リグ数の増加が、原油需給を巡る懸念を再燃させ、原油価格を再下落に追いやるという皮肉な展開となった。
- ・今次局面に話を戻すと、稼動リグ数の増加から遅れること数週間、最近原油が増産に転じ、在庫も増加に転じている。現段階では、①米国以外の産油国(OPEC、ロシア、ナイジェリア等)に対して増産凍結が期待されていること、②米金利の低位安定が金利の付かない原油に追い風となっていること、③昨年と異なり中国経済に対する不安が抑制されていること——などからWTI原油は40-50ドルで安定している。しかしながら上記①については、仮に増産凍結が決定されたとしても需給に働きかける効果は限定的であるとの見方が支配的になっており、②については年内の追加利上げが既定路線で一段のサポートは期待しにくい、③については4-6月期に高成長を記録した反動がいつ出ても不思議ではない。こうした状況に鑑みると、今後の悪材料に対しては脆弱だろう。16年2月以降、クレジット市場(特にエネルギーセクターのHY債)やエネルギー関連株が不気味なほど反発しているだけに注意したい。

